

近藤富枝

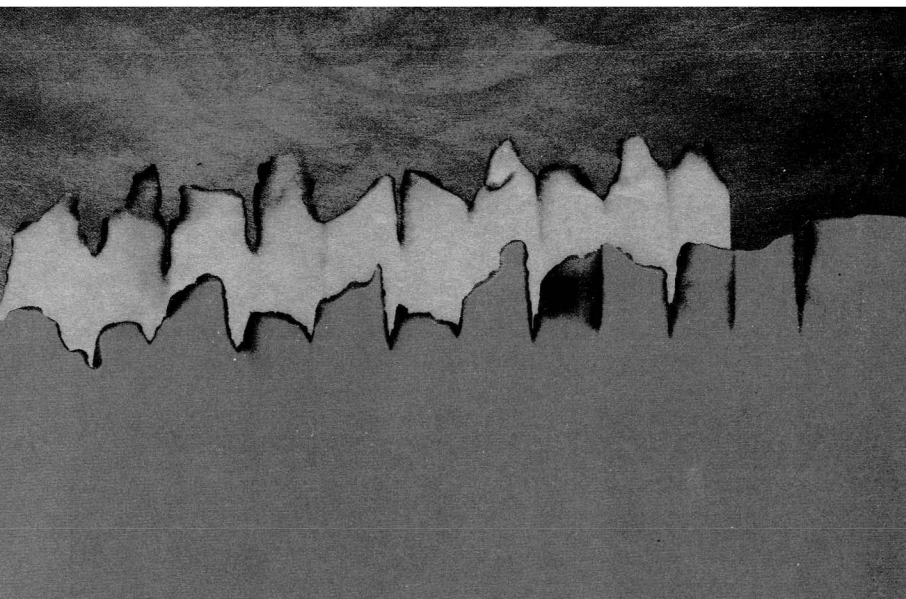
紫式部の恋



近藤富枝

紫式部の恋

講談社



むらさきしきぶ

紫式部の恋

一九九二年二月一〇日 第一刷発行

著者——近藤富枝

© Tomie Kondo 1992, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二二—〇二
電話

出版部(〇三)五三九五—三五〇四
販売部(〇三)五三九五—三六二二
製作部(〇三)五三九五—三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——牧製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

目次

第一章 王風競わず 9

I 大君ぶり 11

II 安和の変 22

III 菟裘賦 30

IV 色好みの宮たち 38

V 千種の宮 41

第二章 作者を考える 57

I 学儒たち 59

II 母のない物語 66

III 父との絆 74

IV 身のほど 81

第三章 紫式部の恋 89

I 共同製作時代 91

II 紫式部の歩んだ道 105

III なぜ武生に下ったか 109

第四章 うつりかわり 127

I 山吹の歌 129

II 寛弘六年 139

III 憂き身 149

第五章 物語の構成 157

I 男の物語か、女の物語か 159

II 光源氏の悲哀 175

III 異筆の存在 182

第六章 宇治 189

I あへどあはぬ 191

II 大君は自殺ではないか 197

III 消えぬるか 204

IV 破局 210

V 横川の僧都 219

第七章 残んの香 229

I 世とものの恋

231

II 尼について

239

III 幸人

247

終りに

253

装幀 中島かほる

紫式部の恋

第一章

王風競わず

I 大君ぶり

「源氏物語」を読んで、最初に魅了されるのは、主人公の光の大君ぶり（皇族らしいふるまい）である。帝の愛子で美貌、学問諸芸に堪能な彼が、つぎつぎと女性を制覇していくのだが、水際だった恋のふるまいに思わず讚歎する。

例えばこんなところはどうだろう。十七歳の光は、悪友たちから

「中流家庭になかない女がいますよ」

とそそのかされる。たまたま仮寝の宿として中川のほとりにある紀伊守きののかみの家に泊りにいき、ここで空蟬うつせみという人妻とめぐりあう。まさに中流の女である。かつては入内いりないを考えていたほどの女性だったのに親が亡くなり、年の違う老受領ろうじりょう（地方官）と結婚した身の上のひとだったと思ひ出し、急に光は恋心を覚える。

その夜は彼女と障子一つ距てたところで夜をすごしているので、絶好のチャンスを見逃すような光ではない。

夜更けを待つて女のもとへ忍んでいく。

「一時の出来心でまいったではありません。年ごろお慕いしていたわたくしの心をわかっていただこうと思ってこうしたおりを待つていたのですよ」

などと口説も堂に入っている。おびえる女を

「悪いことなんていたしませんよ。ほんの少し胸のうちを聞いていただくだけです」

などとなだめて、彼女を抱き上げ、自分のへやへ連れていこうとする。そのとき空蟬の侍女のひとりがへやへ戻ってきたのと鉢合せをするが

「暁にお迎えにまいれ」

と言い放って、光は堂々と空蟬を連れ去るのだ。

こんな具合に、光はかなり強引な方法で女遍歴をする。正妻の葵の上は別として、空蟬、末摘花、朧月夜などレイプ同然のふるまいでわがものにする。

「源氏物語」の作者は一世源氏である光の好色物語を作ろうとして筆をとったものであろうか。

そもそも光は更衣腹である。しかも彼が三歳のときに母が亡くなり、母方の祖母のもとで育てられる。しかし祖母も六歳のとき逝き、それから父帝のもとで育てられた。

これはかなり異例である。皇子を父帝が手塩にかけるなどということは歴史でも類例がない。そのため光は父桐壺帝の寵愛が深く、皇嗣にしたいとまで父帝に思わせる。しかし後楯のない皇子を帝位につけることは世の乱れのもとである。帝は源姓を彼に賜い、八歳で臣下の列に下す。やがて元服。ときに光は十二歳である。加冠して左大臣の娘の婿になった。

この当時十二歳で結婚は、貴人の場合には珍らしくない。大体そうした時は妻が歳上である。光の妻葵も四歳の姉さん女房だった。幼くても初夜に行うのが普通で、光は二人の乳母のどちらから事を習っている。

二人の乳母とは大貳だいにの乳母と左衛門の乳母で、左衛門の乳母の方が年若く、色めいた女らしかったので多分こちらから手引を受けたに違いない。教えているうち興奮して交ってしまうこともよくある例で、乳母が養君の子を生むという話が王朝には珍らしくない。

さて賜姓源氏しげんじであるが、この時代の帝には、中宮、女御、更衣、など後宮にはたくさんいっばんの妃が侍っていたので、皇子皇女の数も多い。皇太子や女御の所生の皇子皇女は、一品から四品までの位を得て宮さま生活をするが、更衣腹の皇子皇女は源姓となって男なら官につき、才分に応じて昇進の道を歩む例も多かった。

そこで光の昇進を書いてみよう。その前に光というのは本名かどうかという問題がある。仁明天皇の皇子に源光があり、右大臣、左大将まで昇り、醍醐朝で活躍している。といって「源氏物語」の主人公のモデルというわけでもなく、物語の方の光は輝くばかり美しい人であるた

めに世人のつけたニックネームらしい。

一方実人物である源光が参議に任命され、公卿となった陽成天皇の元慶八年（八八四）の「公卿補任」を見ると、十六人のメンバーが名を連ねているが、藤原氏七人、源氏六人、その他三人、という配分である。

関白太政大臣 藤原基経

左大臣 源 融

右大臣 源 多

大納言 藤原良世

〃 藤原冬緒

中納言 在原行平

〃 源 能有

参議 源 冷

〃 忠貞王

〃 藤原諸葛

〃 藤原山陰

〃 藤原国経